大学生認知症サポーターによる共生社会実現プロジェクト

大分大学医学部看護学科

学生：揚村彩夏 伊藤愛夏 伊吹優里 熊谷美里 小嶋凛々子 佐村河内詩歩 田辺真莉菜 田福萌乃 野上恵理 栄木香穂 河村美海
小林麻里絵 城戸田楓 近藤慶一 平松安美香 宮崎友紀菜 宮崎福凱（大学院生）

教員：三重野英子 小野光美 岩本祐一 阿部世史美

【地域課題】認知症や認知症の人に関する知識を正しく理解する必要があるが，無関心や誤った理解，偏見がある．

【目的】

1．学生が，認知症の人に対する理解を深め，学生の視点から，共生社会の実現における地域課題をとらえる．
2．当事者，家族が，学生との共同活動を通じて，共生社会の実現に向けた希望や役割を見出す．
3．地域の人々が，認知症や認知症の人に関心を寄せる．

	活動	協力･連携
A	認知症サポーター養成講座	由布市地域包括支援センター（認知症地域支援推進員等）
B	ソフトボール交流戦	なでしこガーデンデイサービス
C	街頭活動	認知症の人と家族の会　大分県支部
D	オレンジハート事業	由布市地域包括支援センター

＜ A 認知症サポーター養成講座 ＞

学生全員，認知症サポーター（認知症について正しい知識と理解をもち，地域で認知症の人や家族にできる範囲手助けする人）になる

認知症地域支援推進員等による講義・寸劇を通して，認知症の人を理解する視点やかかわり方を学ぶ．

≪学生の気づき≫

- 授業で学修していたが，認知症の人とのかかわり方について新たな発見があった．
- できなくなったことではなく，できることに目を向けることが重要と気づいた．
- かかわり方の違いで多くの認知症の方が幸せに生活できると感じた．

＜ B 若年性認知症の人とのソフトボール交流戦 ＞

なでしこヤングイヤーズ（若年性認知症の人） VS はさまナースエンゼルス（学生・教員等）

若年性認知症の人が通所利用するデイサービスのチームと学生・教員チームの真剣勝負

≪学生の気づき≫

- 認知症になっても下を向かず前を向いて生きている．
- 知るだけでなく，一緒に活動することが大切．
- 「その人が得意なことや持っている力を発揮すること」，「仲間と楽しむこと」が重要．
- 皆で楽しむ場があることで，認知症があっても，そこで暮らし続けることができる地域になる．

＜ C アルツハイマーデー街頭活動 ＞

９月のアルツハイマー月間にあわせ，大分市，由布市，佐伯市での啓発活動に参加

「認知症の人と家族の会」の方々と一緒に街頭に立ち，行きかう人にリーフレットを配布

≪学生の気づき≫

- 「私の親も認知症だから」とリーフレットを快く受け取ってくださる方がいる一方で，「大丈夫です」と受け取ってもらえないことも多かった．人々の表情や態度，受け取る人の数に地域差がある．
- 認知症と認知症の人について，もっと地域の人々に知ってもらいたい．関心をもってもらいたい．

＜ D オレンジハート事業への参画 ＞

認知症になっても安心して暮らせるために「今，わたしにできること」…由布市民の声を集める

オレンジハート事業は，認知症啓発を目的に，毎年，由布市地域包括支援センターが，事業所や図書館等で実施．テーマについて，考えたことをハートの付箋紙に書く．この市民の「声」は，由布市の認知症施策に活用される．

市民の声1,228個を整理・分析し，結果をポスターとしてまとめる

≪学生の気づき≫

- 認知症のご本人の「今のままで幸せです」等の声から，これまでと変わらない暮らしが続くことが願いだと気づいた
- 一つひとつを読みながら，書いた人の背景や言葉に込められた思いを感じた．

【大学生認知症サポーターの活動の成果】

◆学生の視点からとらえた地域課題
「認知症の人と一緒に活動する場や機会をつくる」
- 認知症の人と一緒に活動することで，「支援される人」というイメージが一掃され，自分の認知症観が変わる．
- 共生社会の実現に向けて，一人一人が輝ける場を当事者とともにつくることが重要である．

◆認知症の人にとって，個性を輝かせる楽しい時間，ユーモアで学生の緊張を解く等，年長者の役割を発揮した時間になった．

◆家族にとって，学生の気づきや学びが活動の後押しになった．

◆地域の人々には，認知症啓発に携わる学生の姿をみることで，「認知症の理解は全ての世代にとっての課題」というメッセージが伝わるのではないか．